

三番瀬評価委員会自然環境調査関係小委員会（第1回）の開催結果

（概要）

- 1 開催日時 平成18年9月13日（水）午後6時から8時25分
- 2 場 所 千葉県葛南地域整備センター
- 3 出席者 委員3名
- 4 参加人数 22名
- 5 結果概要

（1）第2回三番瀬評価委員会の結果と小委員会の委員編成について

事務局から、第2回評価委員会の結果を説明した。また、再生会議から検討指示のあった「三番瀬自然環境調査のあり方」及び「市川市塩浜護岸改修事業のモニタリング方法」について、評価委員会の意見をまとめるため、2つの小委員会を、委員の参加希望を募り、編成したことを説明した。

なお、細川座長から望月委員に、本小委員会の取りまとめ責任者として、会議の運営及びとりまとめについて依頼があったことを説明し、望月委員に議事進行等をお願いした。

（2）「三番瀬自然環境調査のあり方」についての各委員からの意見

事務局から、各委員より事前に提出された意見の概要を説明した。

また、今後の検討の参考としてもらうため、「県が三番瀬及び周辺海域等で実施中又は予定している環境調査等」について、説明した。

（3）三番瀬自然環境調査計画（案）の検討について

望月委員から、各委員より提出された意見をもとに作成した作業表について（県の調査計画（案）のどこをどのように変えていくのか、理由を明確にし、具体的な提案を出していくためのもの、新規実施分含む）説明があり、個別の調査内容について、それぞれ検討が行われた。

（主な意見）

ア 深浅測量関係

- ・代表測線を設定するためには、過去の測量データを見て、測線を絞っていく必要がある。専門家を含め、詰めていく必要がある。
- ・基準点を設けた標高測定もあったほうがよい。

イ 底質調査関係

- ・調査地点を少なくしても、精度レベルとしては、それほどは問題ない。感覚的には、4分の3から3分の2くらいまで、絞り込めないかという気はしている。
- ・航路内の（底質）調査に関しての条件、手続きについて、次回説明してもらいたい。
- ・物質循環的なモデルを組んでいくのであれば、現況把握の面から、継続して付着微細藻類の基礎生産を測定することが大切である。ただし、コンサルでやるとなると、金額の問題があり、大学との連携など考えないと、この提案は非常に難しい。専門の能登谷委員から聞いてみたい。
- ・付着藻類の基礎生産については、非常におもしろい重大なテーマと思うが、まだこれからの分野ではないかと思う。

ウ 水質調査関係

- ・ケイ酸塩等の測定に係る意見については、なしとしてよいが、経時的な水質調査は重要である。
- ・経時調査については、経費が許せば、重点地点でぜひと思う。ただ、行徳の保護区では、計器の故障が非常に多い。
- ・経時調査については、何を目的に測定するかというあたり。現況把握型というよりは、原因判別型に対応する調査手法という感じがする。経時的に複雑な変動を拾っていくため、データ量も膨大で、どう解析してくかが難しい。三番瀬全体の現況把握の中の水質という位置付けを、もう一度見直す必要があるし、底生生物調査等との関係も見なければいけない。

エ 底生生物調査関係

- ・「中層大型底生生物調査」については、アナジャコの巣穴の目視的な調査をやった。掘り上げるのは無理で、従来の方法では採れず、開発試験的な部分が強い。一つ抜けているのは、干出部の潮の影響がある範囲のカニ類その他の調査である。
- ・過去にあるデータを解析して、ある範囲はこの地点で代表できるということを絞れば、地点数を減らすことができるのではないか。

オ 魚類調査関係

- ・大型のものに関しては、現況把握としては、やってもあまり意味がないのではと思う。
- ・釣り人からのデータは、釣り人自身がいる場所が限られているため、データは偏ってしまう。刺し網の試験操業についても、うまく入れる場所はあまりないと思う。比較的小さいものを中心に調査を続けるというのが、イメージとしては一番とりやすい。

カ 藻類調査関係

- ・藻類調査が年1回と非常に少ないので、補完する意味で市民参加型の調査を入れたい。アオサであれば、分類精度は比較的担保でき、環境学習にもなる。例えば、沖合の部分は専門の人がやって、岸の部分は市民にやってもらう。
- ・鳥類観察会の際など、渚を歩いて観察、記録できる方策を決めておけば、概略ならできるのではないか。あまり精度が高なくても、重ねていくことで、利用価値はあると思う。
- ・市民参加型の調査は、現場に慣れていない方が多く、まだ最初の訓練段階である。特に、定量的な部分は難しく、立ち入れる範囲も限界がある。三番瀬全体の現況を把握する上で、どう利用していくか、専門的な検討が必要である。県がどういう調査を組むのかメインにしながら、それとの関係での市民調査だと思う。

キ 付着生物調査関係

- ・全部の種類を細かくというのは難しいが、重点的なものをある程度わかるような形のハンドブック・調査マニュアルがあれば、市民調査として、いろいろな方に参加してもらえようになるのではないか。
- ・護岸形状等により、棲んでいる生物がパターン分けできるかどうかということ、現状として把握したい。
- ・三番瀬全体の現況を把握する上で、どのレベルの精度でどう調査をしなければならぬか、まず第一にあると思う。
補足調査では、付着生物調査などは、省いた部分であり、全体の調査計画の中でどうするか考えなければいけない。

ク 鳥類調査関係

- ・経年調査等は5年に1回の頻度であるが、月1回やっている観察会のデータが概数としてあるので、これらを利用し補足していけばよい。
- ・三番瀬という場をなぜ鳥が利用するのかという部分、「場の評価」の視点がまだ入っていない。場というものを考えながら、データを取る必要がある。

ケ 新規に実施すべき調査関係

- ・航空写真については、当面は、市販のものを入れていだけでも、三番瀬と周辺環境が、どのように動いていくかよくわかると思う。余力があれば、昼間に大潮で一番引いた時間帯があれば、好ましい。定点撮影についても、景観では特に必要なものだろうし、180度くらいの何力所か点を決め、撮影を続けていくとよい。
- ・浚渫窪地に関しては調査が遅れており、三番瀬に対してどういうふうに影響しているか、アサリが落ちているのではないかなど、年に何回ということではなく、ちょっとやってみたらいい。また、江戸川放水路の生態系がどうなっているか心配である。

出水時とかイベント的なところは、重要と考える。一般に河川でも定常時で環境を評価するのはだめらしい。

- ・出水時に特に影響があるのは江戸川放水路と思うが、これについては国のほうで調査をやっている。そういうものを参考にし、国が管理している部分なので、今後、必要があれば、国と県の協議をお願いすることもあるかと思う。
- ・河川流量については、国等でデータを持っていればそれを使用し、あとは排水分ということで、市が持っているものがあれば、提供してもらおう。各市が持っているかを確認してほしい。
- ・排水分については、無視できる量ではないかと思う。
- ・「河川・周辺都市域などの調査」については、市や河川管理をしているところから、情報収集を常に行い、検討に供するようデータベース化してほしい。「東京湾全域の調査」は、新規にすぐやれということではなく、視野にいれておく必要がある。「青潮調査」については、県の水産・環境部局でやっている情報を、事務局として常に入手し、利用できるようにしてもらいたい。

(会場からの意見)

- ・澁筋から西側の猫実川河口域において、測点を10ポイント設置して、測量を継続して実施しているので、参考としてほしい。
- ・猫実川河口域の底質調査のポイントを増やしてほしい。また、カキ礁の評価を何らかの形で測定してほしい。

(4) 今後の進め方について

事務局から、10月26日開催の第3回評価委員会開催までの小委員会における検討スケジュール(案)について、説明した。

(望月委員のまとめ)

11月の再生会議への報告に向けて、検討スケジュールにそって、小委員会における検討を進めていく。

きょうの意見を参考にしながら、各委員は、

指示事項に対する回答部分である現況把握型の調査をまず組む。

また、プラスアルファの部分である原因判別型、事業対応型を含めて、具体的に調査のどこをどういうふうにするのか、目的・調査地点数や測線配置など決められるよう、検討する。

なお、調査の実施体制等についても、検討対象とする。

10月6日予定の第2回小委員会に、検討結果を持ち寄り、再生会議への報告(素案)について検討する。意見が一致する部分、しない部分も出てくるかもしれないが、よりよい調査計画(案)をつくっていく。以上